



腰越・長谷 和田塚

前回の葛西善蔵にひきつづいて、関東大地震当時（大正十二年）鎌倉に在住したもう一人の文人である久米正雄の震災記から話をはじめます。それは『地異人変記』と題されて『微笑随筆』（文芸春秋新社、昭和二十八年）におさめられています。

地異人変記

『私は丁度其の時、鎌倉長谷の避暑のために借りた家で、或る人への手紙を書き終っていた。』と云う書き出して地異人変記は始まります。

『其の口、忘れようとも忘れる事の出来ない大正十二年九月一日、二百十日前日の午前は、夜来から厭に蒸暑く、荒れ気味の濃雲が走って、時々驟雨がばらばらッと来るかと思うと、天の梳き切れがしたように、気味の悪い日がじわじわと差したりして、地震でなくとも何かの荒れを暗示する、厭な天候だった。今日が恐らく賑かだった今年の、最後の、海水浴場の土曜日だとは知っていたながら、とても海へ行く気などしない天気だった。私は朝起きるときから、其の不順な天気模様を眺めて、



写真1 腰越、浄泉寺の供養塔碑



写真2 長谷寺の見晴台に建てられている久米正雄像

いつも夏場の鎌倉が、必ず一度は受けるべきシケが、今年は八月が終ってもまだこない事を思って、もう来てもいい時だなぞと考えていた。そして此の間中停車場前の平野家へ、矢張り避暑がてら仕事に来ていた芥川龍之介が、何かの拍子にほんとの真顔で、「今年はきっと何か大きな天変地異があるぜ。或る古老もそう云っていたそうだし、僕自身何だかそう云うような気がしてならない。」と幾度も繰り返して繰り返して予言していたが、其の時私たちまで、「ほんとにそう云う気はするね。何だか余り世の中が間違っているから。」などとすっかり冗談に云っていたのだったが――。』

『――。第三枚目に移って、「そして」と三字書いた時だった。そして、どーんと何だか陰に窮った、遠い地響きがどろどろと尾を曳く一瞬、急に縁に近い机の前の、座布団に載せていた私の身体は、重く地の底から揺り上げられるように覚えた。と同時に、家中はぐらぐらみしみしと鳴り互って、これは大きな地震だな、と思いながらも周囲を見廻して、隣室にいた吉田女史と顔を見合せつつ、揺れ止むのを待つような心持でいる途端、更に大きく陰気な地響きとも家鳴りともつかぬ音響と共に、激しい上下動がどろどろと私たちの矮屋を衝き上げた。そして忽ち隣室との境に片立てた唐紙が、ケシ飛ぶように私の室の方へ倒れて来た。――。』

『戸外へ飛び出したのは、鳥渡躊躇したに拘らず、私が一番早かった。今から思うと揺れ初めてから、一分と経っても、二分とは経たなかったらしい。――。』

『其の間も、揺れは止まなかった。止まなかったどころでなく、更にもう一度大きな上下動が波の高まるようにどろんと起って、私たちの踏んでいる大地が、ぐらぐらッと家の中でのように揺れた。――。それ迄は揺れながらも、瓦の落ちる位と思っていた前の母屋の、文化住宅がかった和洋折衷の二階家が、そのひと揺れを食ふと見る間もなく、ばらばらと赤い動乱する色を帯びた。初めまさか倒れるとは思わなかったので、どうなったのか、鳥渡見当がつかなかったが、それは赤い西洋瓦を乗せたまゝ、高い二階の屋根が崩れ落ちたのだった。が、何だか一瞬間、嘘のような気がした。其の強震は暫らく続い

た。そして其の二階家に接続した、母屋の裏の日本建の古い平家の柱や戸や壁をばらばらと■すように倒して、屋根を其中へ落ち込ませた。——。』

『大丈夫。もう余震です。が、これから怖いのは海嘯です。』——。

「大海嘯は、激震から十五分乃至二十五分位の間に来る。三陸の大海嘯の時も、二十分後に沖から切り立てた壁のようなものが、ずーッと押し寄せて来たさうだ。」私は記憶に少しの誤りはあるか知らぬが、そんな事を矢張り同じ新聞学問で知ってゐた。——。』

『——。が、それにも増して、十五分後に来ると思ふ海嘯が恐ろしくて、胸も足も、わくわくして来た。潰れてゐる人も人だが、そんなものよりも、生き残った人も何も一束にして、持って行くに違ひない、あの大海嘯が恐ろしかった。それは少くとも十五分過ぎには必ず来るに違ひない。……さう思ふと私は思ひ切つて、单身様子を見に、一番近い長谷観音の山へ、上つて見るに如くはないと思つた。で、其処に在った財布だけを身につけて、家の物などは凡て其儘、直ぐ前の長谷観音横へ通ずる径へと走り出す事にした。——。』

『私は境内を限る崖の端に進んで、松の間から、鎌倉湾

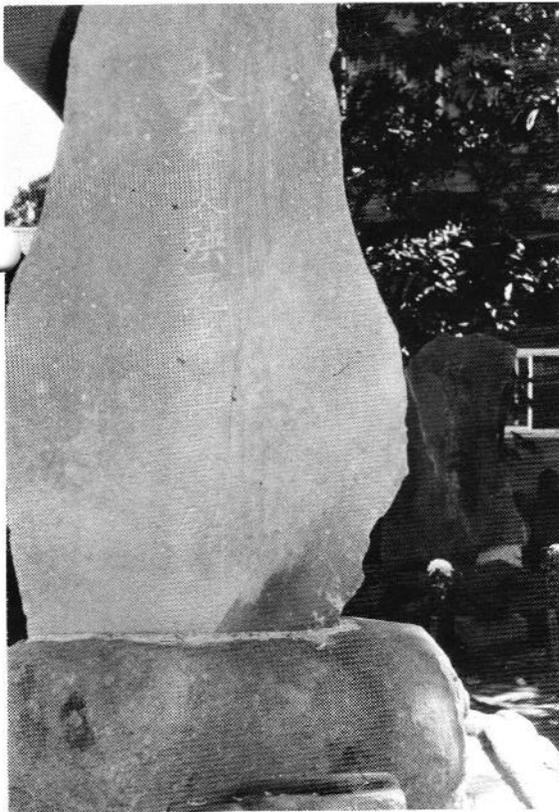
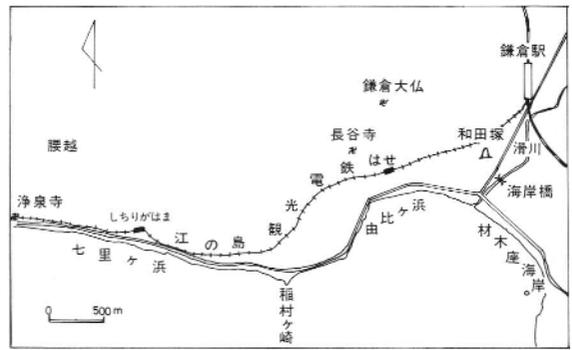


写真3 和田塚に建てられた供養塔碑



一帯を眺めた。するとどうだろう！湾内の海水は、いつも浸してゐる岸から二三町も沖の方まで、すっかり干上つてゐるではないか！それはずっと材木座の方まで、たゞ所々瀧水を残した干潟となつて、海藻が岩かは知らぬが、所々黒く点々と残して、薄気味悪く空を反映してゐる。……そして其の先に、一と目見たところを誇張して云へば、殆んど小坪と稲村ヶ崎とを連結する線あたりに、白く砕けた波頭を持った海水が、思ひのほか平穩に寄せ返してゐた。——。』

『其の中に、ふと見ると、干潟には漸次、波が押し寄せ来て初めた。それは併し、私が予期したやうな壁の如きものではなかつた。たゞ長谷寺から見ても、いつもの土用波の、二三倍かと思はれるものが、矢張りいつもの波のやうに、波頭を白く泡立たせて、波脚とてもさう早くなく干潟を満し始めてゐた。たゞ其の高い波頭が漸次岸へ岸へと干潟を噛んで、近寄つて来る形は、さすがに少しは物凄かつた。——。』

『——。「今坂の下は海嘯で大変です。海岸の家は大抵持って行かれて了つた！』

一人の男が、境内へ逃げ上つて来て、さう云つた。——。』

鎌倉の材木座に「恋愛館」をかまえ、「近代文学十講」や「文芸思潮論」などを発表して、西洋文芸の紹介や近代思潮の解説につくした京都大学教授の厨川白村が、この津波にのまれたことは良く知られています。夫人とともに津波を避けるために滑川にかかる海岸橋を渡ろうとした時、橋もろとも上流に押し流されてしまいました。夫人は近所の人に助けられました。

江ノ島電鉄の長谷駅付近では、津波は軌道をのり超えました。腰越の浄泉寺や和田塚に関東大震災による歿者の供養塔碑が建てられています。これらの被害者の多くは津波に呑まれた人達だと云われています。(平野富雄)